

岩手医科大学歯学会第2回総会抄録

日 時：昭和51年11月7日(日)

場 所：岩手医科大学歯学部講堂

演題1. 過去1年間における岩手県立中央病院歯科口腔外科外来の実態

○小川邦明*, 千葉 清, 山口一成, 小口順正

岩手県立中央病院歯科口腔外科*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第1講座

私達は昭和50年4月から昭和51年3月までの1年間に岩手県立中央病院歯科口腔外科外来を訪ずれた患者の臨床統計的観察を行なって、今後の地域医療の指針を得ようと種々検討を行なったので報告する。

昭和50年4月から昭和51年3月までの1年間に当科を受診した新来患者数は1,101名で、再来患者数は6,366名であった。

1. 患者の実態

1) 月別頻度

月平均新患者数は91.7名で、再来患者数は530.6名であった。

2) 性別、年齢別

性別では男476名に対して女625名で男女比は1:1.31であった。年齢別では20才代が最も多く、次いで10才未満、30才代となっている。

3) 地域別

市町村別では盛岡市が76.1%で最も多く、その他は近郊の市町村からの来院が多かった。盛岡市では、山岸、加賀野など病院に近距離の地区からの患者が多くみられた。

4) 来院患者の分析

来院患者を便宜的に院内、院外に分類してみると、前者では職員22.8%、入院患者13.7%と院内も多く、サービス機関的面も持っている。

5) 紹介患者

歯科的疾患はベット数の多い内科系の入院患者の紹介が多かった。反面、口腔外科の疾患は耳鼻科、外科など隣接科からの紹介が多かった。

2. 症例分析

1) 主訴に対する診断別頻度

保存的疾患が68.1%で最も多く、口腔外科的疾患が24.5%、補綴的疾患7.1%であった。

2) 保存的疾患

う蝕が最も多く38.4%、歯根膜炎24.0%であった。

3) 口腔外科的疾患

残根などの歯牙疾患32.2%、炎症30.7%と歯科的なものが圧倒的に多くみられた。

4) 補綴的疾患

欠損の症例が34.6%、補綴物破損26.9%などとなっている。

演題2. 本学附属病院開設以降10年間に補綴科で装着された各種補綴物の統計

○吉田 忠, 小林琢三, 山田芳夫, 塩月牧子, 羽田野明, 黒田 賢, 松村文英, 中嶋 武, 川守恵美子*, 真山優子*, 小浜哲郎*, 近藤聖二*, 志田杜人*.

岩手医科大学歯学部補綴学第1講座

岩手医科大学歯学部補綴学第2講座*

昭和41年1月より昭和50年12月に至る10年間に、岩手医科大学歯学部附属病院補綴科外来患者に装着した各種補綴物の製作状態について調査した。この間に製作された補綴物の総数19,762個は、次のように分類された。(1)製作頻度で最も多いものは、局部床義歯の6,209個で、各種補綴物の総数19,762個に対して31.4%を占め、次いで全部鑄造冠の3,767個19.1%、以下総義歯2,445個12.4%、架工義歯2,278個11.5%、修理1,661個8.4%、継続歯1,414個7.6%、ジャケット冠1,168個5.9%、前装冠776個3.9%、そして、顎補綴44個0.2%の順となった。(2)製作推移では、総義歯は、ほぼ毎年その割合は異動せず、局部床義歯が当初40~50%台を占めていたものが、後半年度において20%台に年々減少傾向を示した。一方各種歯冠補綴物の占める割合は、年々増加傾向を示している。ここ

では、前装冠の急激な増加が注目された。架工義歯は年々増加する傾向がみられた。(3)年令別との関係は、総義歯では、60代、50代で1,439個、総数2,445個の58.9%を占め、次いで40代17.3%、70代17.0%、30代3.9%の順となった。局部床義歯は、40代1,570個、総数6,209個の25.3%、次いで50代23.4%、30代18.5%であった。各種歯冠補綴物では、20代2,120個、総数7,125個の29.8%、次いで30代22.7%、40代19.3%となった。また、架工義歯においては、20代879個、総数2,278個の38.6%、次いで30代22.3%、40代19.0%、そして、10代12.2%であった。

演題3. 学童の齲蝕罹患傾向と処置歯率に関する疫学的分析

○田沢光正, 原田 潮, 飯島洋一, 松田和弘,
高江洲義矩, 原田順男*

岩手医科大学歯学部口腔衛生学講座
岩手医科大学歯学部補綴学第1講座*

前報において、私共は乳歯齲蝕が現在、1、2歳の低年齢児に多発傾向にあるために、永久歯の齲蝕予防のための歯科保健指導の効果が減弱されている現状を指摘した。今回(1976年調査)、東北地方の5地区における小学校児童の齲蝕罹患状況を分析して、齲蝕の疫学的標示に用いられるDMF、すなわちCaries experienceの内容について、いくつかの考察を試みた。とくに、学年別児童について歯種群による齲蝕の罹患傾向と処置歯(F)の推移についての地域差による要因を検索することを目的とした。調査対象地区は、青森県北津軽地区および東目屋地区、岩手県松尾および宮守地区、山形県上山地区であり、いずれも農山村の小学校児童1年～6年生である。被検者総数:1,888名。調査結果として、6歳頃から11歳頃までの齲蝕罹患傾向をDMFT指数でみると回帰直線であらわすことが可能であり、直線の傾向は地域差を示す指標となりうる。DMFからF歯率を算出して地区における齲蝕の処置状況について考察してみると、F歯率の高い地区は齲蝕罹患が減少する傾向にあるが、齲蝕多発地区(東目屋)についてみれば、処置歯率の増加がみられる一方、DM率の著しい増加傾向が認められる。このことは、歯苔の付着が異常に多発している小学校児童の現状に、単なる予防充填処置をもってしても齲蝕

の減少効果が得られないことが言える。齲蝕罹患の高い第1大臼歯群と上顎前歯群についての検討を行ったが、とくに上顎前歯群の罹患上昇が著明であり、小学校4年生より急激に増加して、6年生時ではDMF歯率が20～30%に達している。若年者の上顎前歯部の処置が容易でないことから、その保護の重要性が急務であることを強調する。なお、本調査地区において、飲料水中フッ素濃度は北津軽地区が0.3～3.2ppm、他の4地区は0.1ppm以下であった。

演題4. ランカスター・クレフト・パレート・クリニックでの口蓋裂患者の治療

○亀谷哲也

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

Lancaster Cleft Palate Clinic は唇、顎、口蓋裂患者及び顎、顔面、頭部の異形成、障害を対象とした診療所で1936年一矯正専門医であるDr. H. K. Cooper, Sr. によって開設された。現在アメリカにはこの種の診療所は244カ所あるがその中でも歴史の古い所として知られている。

この診療所の機構は臨床、言語治療、Social service、研究の4部門に大きく分け、各部門のstaffが横に密接な連携を保ちながら治療にあたっている。診療部門ではdiagnosis and multidiscipline clinical treatment and rehabilitation を目指し、研究部門では、longitudinal research in cleft lip and cleft palate を研究活動の基礎としている。

治療は患者の出生と同時に開始され、まず両親は小児科医のもとで授乳等保育と今後の治療上の諸問題について概要が説明される。診療所では、主任(補綴医)を始め形成外科医、矯正歯科医、言語治療者、聴力学者、遺伝学者が夫々の立場から診査、治療を行なう。Social worker は州政府に対する医療補助の手続きも含めて、事務上の相談と、家族ぐるみの治療の進め方、更にその後の社会生活に対する指導相談を行なう。

長期治療体制の最初の診査時(新生児の場合は3カ月以内)から資料が整えられる。通常定期診査は半年毎に行なわれ、年に1～2回は顔面及び口腔内写真の撮影と印象採得、頭部X線規格写真、X線映画、聴力テスト等が基本資料として残される。

口唇を始めとした形成手術は、出生後10週以上、ま